

## 『背徳者』にみる進化論的発想

津川 廣行

その表題からして、『背徳者』は、モラルの問題に真っ向から挑んだ、モラリスト・ジイドの面目躍如たる作品である。その主要テーマは、既成観念と、そこにおさまらないミシエルの新しい生き方のあいだの闘争であり、この作品は、自由と拘束というジイド的なテーマ<sup>1)</sup>によって覆い尽されているかにみえる。しかし、それだけであろうか。

筆者は、これまでも、ジイドの思想には進化論の影響がみられるとしてきたが、本論文はその一環として書かれることになる。その進化論的発想は、晩年にいたって、複雑系的思想とでもいうべきものへと導かれる、というのが筆者の構想である。それによれば、進化論の影響は、作品でいえば、すでに『地の糧』に始まっている。また、David H. Walker はたとえば、少し下って、『鎖を離れたプロメテウス』こそは、進化論の影響のもとに書かれた最初の作品である、としている<sup>2)</sup>。では、その三年後に書かれた、『背徳者』の場合はどうなのであろうか。このような関心のもとに、本論文では、『背徳者』にもまた進化論的発想が見られる、という結論が導かれることになる。

ところで、『背徳者』が属する「レシ」というジャンルは、基本的には、進化論的・複雑系の世界を描出するには不向きな語りの形式である。出来事自らが、自らの進行を選び取っていくというような「ソチ」や「ロマン」とは違い、「レシ」での出来事は、語り手によって、物語に仕立てあげるといふ観点から篩い分けられたものである。たとえ、レシの語り手（ひいては作者ジイド）が、進化論的・複雑系の世界への視角を持ちあわせていたとしても、自らの体験を「レシ」へと還元ないし整合化するという技法でもってしては、不整合な複雑系世界のがさついた全体

像を描くことはできない。ジイドのレシ群が、それでも進化論的発想を含みうるとすれば、それは、ジャンルの決定にかかわるその骨格においてではなく、各々の作品がもつ固有のテーマ、そして作中人物達が述べる意見や風景描写といった細部においてでしかない。

われわれにとって幸いなことに、ミシェルは知識人であり、随所でその思想表明を行っている。彼は結核、そして生への回帰という体験から、「vie」(命)を賛美する新しいモラルに目覚める。「レシ」である『背徳者』が進化論的であるとすれば、「新しい命」の誕生、あるいは病気からの「蘇生」という『背徳者』固有のテーマによってである。

モラルとは、来るべき様々な経験に先だつもの、そして未定の様々な局面における使用に前もって耐えうるものでなくてはならないものという意味で、非時間的・非歴史的な、形式的主張であるといえる。ミシェルのモラルが、彼の歴史観として表明されているということの意味を、ジイド評者達が、これまで正面から受け止めることはなかったのも、モラルというものがもつこの根源的な非時間的性格のためではないだろうか。ところがミシェルは、歴史家であり、考古学者である。彼のモラル観は、次のように、考古学者としての歴史と文化にかんする自説の主張の一環として披露される。

私の講義は、そのあとすぐに始まった。主題に引き寄せられて、私は、最初の講義に新しい情熱のすべてを注ぎ込んだ。末期ラテン文明に関して、私は、まず最初は血の気の過多、健康の過剰さを指し示すものであった分泌液と同様に、人民と同じ高さまでのぼった芸術文化を描き出した。その分泌液は、そのあとすぐに凝固し、固くなり、精神による自然とのどんな完全な接触とも対立するようになり、生の持続的外観のもとに生の減少を隠し、窮屈になった精神が憔悴しやがて萎れ、そして死んでしまう殻をつくるようになる。最後に、私は、自分の考えを極端にまでおしすすめ、文化とは命から生れて、命を殺すものである、と言った<sup>3)</sup>。

最初は生き生きとしていた一時代の精神が、爛熟期を過ぎると硬化し、その文化自体を絞め殺してしまうというこのミシエルの歴史観は、生命のモラルという彼一個人の新しい生き方の問題として見過ごされてきたといえる。「vie」「命」（生、生命、人生）という語の多義性が、事態を混乱させている。文化というものが幾世代にもわたるいくつもの vie（人生）の累積としてある一方、累積されたその文化が窮屈な殻に喩えられるとき、vie という語は、その殻のなかで瞬間にして燃え上がる、激しくもまたもろい、一存在の『地の糧』的情熱として読まれてしまう。「文化とは命から生れて、命を殺すものである」という逆説は、この vie という語の揺れを利用してはいえる。

ジイド評者達は、学者としてのミシエルにたいし、信を置いてこなかった。たしかに、ミシエルは、考古学者でありながら、過去の歴史の不動性を、死の固定性として恐れるにいたる（621）。これをふまえて、Michael Johnson は次のような判断を下す。「考古学者として、ミシエルは、不動性によって励まされるのを感じることもできたはずである。ところが、病人として、彼はそれを恐れる」<sup>4)</sup>。ただし、ミシエルの感性を病人の過敏さに帰することで、Johnson は、新婚旅行と現地調査とをかねた主人公の歴史体験を、病気と治癒というその個人的体験へと還元してしまったといえる。

上の引用文でミシエルが述べているのが考古学者としてのその講義の内容であるのに、である。ここで末期ラテン文明 *l'extrême civilisation latine* とされているものは、ギボンの『ローマ帝国衰亡史』における分類によれば、ローマ帝国衰亡の三つの時期のうち、その第一期、すなわち西ローマ帝国が滅亡し、さらには、「ローマをついにゴート人征服者の権力下に隷属させてしまう」という変革が完了したところのほぼ六世紀の初頭あたりまでである<sup>5)</sup>。「その分泌液は、そのあとすぐに凝固し、固くなり、精神による自然とのどんな完全な接触とも対立するようになり、生の持続的外観のもとに生の減少を隠し、窮屈になった精神が憔悴しやがて萎れ、そして死んでしまう殻をつくるようになる」の部分が、ローマ

帝国衰亡についてのミシエルの論の骨子をなす。ところが、この講義内容は、これが「文化とは命から生れて、命を殺すものである」という極端な考えにまで推し進められるとき、専門領域としている時代についての一考古学者としての見解というより、その個人的体験にたいする自己弁護の論理として読まれてしまうことになる。

なるほど、青白い秀才だったミシエルが、病気という体験をつうじて、「生命」、「大自然」、そしてその生命をしがらみから解き放つ「瞬間」の信奉者となったこともまた事実である。彼は、人工的なもの、死の匂いのするもの、変化することをやめた硬直したものを嫌うにいたる。『地の糧』にもつうずるミシエルのこの新しいモラルは、彼自身も時にそうしているように、またジイド評者達も好んでそうしているように、一見したところ、自由と拘束、自然と人工、生と死、硬直した過去と豊かな未来といった二項対立的観点によって十分に説明できるようにもみえる。

しかし、このようなスタティックな観点によっては、ミシエルの意見が歴史観でもあることを見逃してしまうことになる。「文化とは命から生れて、命を殺すものである」というミシエルの結論を、「文化」対「生命」という単純な対立のうちに閉じ込めてしまうことはできない。「命」と対立するようにみえて、「文化」というものは、実のところ「命」から生れたものだからである。ミシエルの苦悩が、絡み合いながら進展きた「命」と「文化」のあのダイナミズムから生じたものであることを見逃してはならないだろう。

新しい生に目ざめたミシエルの、次のような新しい生活パターンについても同様である。昼には、彼の農地の管理者ボカージュの息子シャルルと野原を駆けずり回り、夜には講義の準備をするこの考古学者は、次のように述べる。

とはいえ私は、暮れ方や晩の時間をできるだけ講義の準備のために取っておいた。仕事は、はかどり、私は満足だった。そして、あとになって講義を本にまとめてみるのも不可能ではないと考えた。一種の

自然な反動によって、私の生活が秩序立てられ、規則正しくなり、身のまわりのあらゆるものを規則化し秩序化することに喜びを覚える一方で、私は、ゴート族の粗野な倫理に次第々々に熱中するようになった。そして、講義の間中、人々が後になってしこたま非難することになったほどの大胆さでもって、無教養を称揚し、その擁護につとめたのだが、他方では、私の身のまわり、また心の中でその無教養を思い起こさせるものすべてを抹消とはいわないにしても抑えつけようと一生懸命に工夫を凝らしていたのであった。(640)

ここで、ミシェルは、昼と夜、秩序と無秩序、規則化と無規則化、教養と無教養の間で引き裂かれ、各々を使い分けているようにみえる。ジイド評者達が、二つのモラルのあいだで引き裂かれているミシェルの姿勢については論じても、その歴史観には注目してこなかったのも、そのためであろう。とはいえ、「ゴート族の粗野な倫理に次第々々に熱中するようになった」の部分では、この「ゴート族」と対立するのが、文化を硬化させていったローマ人なのであるから、さきほどと同じ歴史的背景の上で、同じ主張が繰り返されていると見ることができる。もっとも、非難を浴びたというその歴史観が、新たな生き方の説明と正当化のために持ち出されたと思われても仕方がないような、概略的なものでしかなかったこともまた否めない。

ところで、「背徳者」ミシェルの三大悪徳といえ、**「不節制」と「同性愛」と、また過剰なほどの「自由」**であろう。この三つの柱について、ジイドは、歴史的文脈において、一九二一年の『日記』で、正確にいえば一九二一年分の『日記』のあとにおかれた『断章』で、次のように論ずることになる。

ルネサンスの不節制、ギリシアの同性愛、古代ローマの奴隷制を残念に思うこと、これは残りのものを軽んじるのでなければうまくいかないであろう。だが、ここではすべてが緊密な相関関係にあるのであ

って、ルネサンスの生の過剰は同時にまた風俗へとあふれ出るのでなければ文学へとあふれ出ることではできなかったのだし、同性愛がなければギリシアはその彫刻に相応しくなかったことであろうし、私の前にすでに言われていることだが、ローマの奴隷制が自由人を可能にしたのであると納得することのほうがよっぽど賢くないだろうか——また、ジャムの理解力欠如が彼の詩に有利に働いている、と<sup>6)</sup>。

ここでジイドは、一時代における一社会の、制度や慣習や文化や芸術など、《すべてが緊密な相関関係にある》システムを夢見ているといえる。このような社会システムを、ジイドが進化論と関連づけていることは、一行の空白を置いて、「進化」という小見出しではじまり《全進化は、神に至らねばならぬ》のフレーズで終わる、神の問題を進化論的に論じた文——筆者が《来るべき神》と呼んでいるところの思想<sup>7)</sup>が述べられている文——がつづくことから分る。また、この「ルネサンスの不節制」ではじまる文の前には、芸術作品においてすべては関連しているわけであるから、ドラクロワからタッチの荒々しさだけを、アングルからあの冷たさだけを排除するわけにはいかないといった趣旨の文が置かれている。以上の三つの文の比較からして、ジイドが、ここで、一つの社会をも、一つの芸術作品をも、また一人の人間をも、その構成要素のすべてが、互いに緊密な相関関係によって結ばれた総体、いわば複雑適応系<sup>8)</sup>としてとらえていたことがわかるであろう。

なるほど、一九〇二年の『背徳者』では、このような総体としての社会は、暗示されるにとどまっている。ここで明示的に描かれているのは、むしろ、喪失されてしまったあるべき社会であり、《緊密な相互関係》が崩れてしまった社会、そのために硬化してしまった社会である。ブロックされてしまったこの相互関係をミシェルは回復しようとする。事実上、それは自由と拘束、自然と人工といった二元論的用語のレベルにおいてであるとしても、ミシェルが究極的に夢見たのは、たとえば以下のように、自由と拘束の和合状態である。

あらゆるものが果実のために、有益な収穫のために準備されているこの土地の例は、私にきわめて好い影響をあたえるにちがいないと私は考えた。豊饒な牧草地のなかのあの頑健な去勢牛達やあの孕んだ牝牛達はなんとという安らかな未来を約束しているのだらうと感心したものだ。丘の好都合な斜面にきちんと植えられたリンゴの木は、今年の夏のすばらしい収穫を告げていた。果物のなんとという豊かな重みのもとにやがてその枝がたわむのかを私は夢見た。この秩序だった豊かさ、この喜ばしい隷属状態、この微笑みに満ちた耕作地から、もはや偶然ではなくて教え込まれた調和が生じていた。それは、一つのリズムであった。それは、人間的であると同時に自然のままの美であった。ここでは、もう自分が何に感心しているのか分からなくなるのであった。それほど、自由な自然の豊かな開花とそれを統制しようとする人間の巧みな努力とが、きわめて完全な和合のうちに一体化していた。この努力は、もしそれが押さえつけている力強い野性がなかったらいったい何であろうか、と私は考えた。このあふれんばかりの樹液の野生的なほとぼしりも、それを堰き止め、ほほえみながらそれを豊かさへと導く知的な努力がなかったら、いったい何であろうか、と。そして私は、あらゆる力が非常によく調節されており、あらゆる消費が非常によく補われていて、あらゆるやり取りが非常に厳密になされているので、ごくわずかなロスも感じられるような土地を思わず夢見ている。次に、この夢を人生へと適用して、私は、賢い拘束によって自分を完全に用いることの知恵となる一つの倫理を自分のために構築した。(633-634)

自然と人間、自然と人工は、自由と拘束として対立しているようにみえながらも、同じ地平にあって、ある一つの環境システムをなしていること、《すべてが緊密な相関関係にある》こと、そしてそれは調和し和合しなければならないものであることを、『背徳者』のジイドは知っている。「あらゆる力が非常によく調節されており、あらゆる消費が非常によく補われていて、あらゆるやり取りが非常に厳密になされている」の部

分は、互いが互いに適応した生物システムをさえ思わせる。ただそのシステムは、ここでは、自由と拘束、あるいは自然と人工という二元的要素の調和の関係へと還元されてしまっているように見える。二元論的用語で語られる、調和というミシエルのこの理想は、一九二一年におけるあの進化論的・システム論的世界観を先取りしたものであり、これを二元論的平面に投影したものであるということがいえるであろう。

考古学者でありながら、ミシエルは、固定され動かしがたいものとなった過去ではなく、いまだ定まっていない未来に期待をかけるようになる。他方またミシエルは、制度の、習慣の、知恵の、意識の発生の段階、いわばその起源に興味をもつに至る。以上の調和をミシエルが夢見たのが、彼の所有地であるノルマンディーのラ・モリニエールにおいてであることは意味深い。彼は、この地で、プリミティヴなもの、すなわち、彼の肥沃な農地と豊かな自然、そして、そこに暮らすほとんど動物的本能でもって生きている農民の子や労働者、さらにはアルジェリアおよびその少年達への、ほとんど病的なといってほどの関心にとりつかれてしまう。もし、「文化とは命から生れて、命を殺すものである」とするならば、文化が命を殺してしまう以前の段階、文化が命から生まれたばかりの状態へと戻ればよい。こうして、ミシエルは、野原を、農民の子シャルルと駆けまわる自然児となることで、心の平衡をとりもどす。

ところが、彼に田園生活の魅力を教えてくれたシャルルも、やがて都会へ出て行き、山高帽をかぶった紳士となって戻ってくる(664)。アルジェリアにしても、再び訪れたとき、もう大人になってしまった少年達の姿がミシエルを落胆させる(685)。期待をかけていた調和は、あえなく流れてしまった彼の子供と同様(658-659)、束の間のものでしかなかった。

夢見た調和が成立しないとき、自然児ミシエルは、既成の制度の反対側に立つ者、表題通りの「背徳者」であるように見える。とはいえ、既成の文化・制度へのミシエルの批判が根柢をもつのは、彼が、アウトローとしてその外に立つときではなく、むしろ、それが発生する地点に身



をおくときである。老化した文化が正当に批判されるのは、文化が命から生れたばかりのその調和した発生地点に身をおくことによってである。

モラル、社会の制度や慣習、そして善悪の基準である倫理はどのようにして発生したのか、この発生の問題は、モラリスト・ジイドにとって生涯の関心事であった。いや、彼にとっては、発生の仕方だけではなく、それ以上に、それが、既定のものとしてつねにすでに存在していたのではなく、何かのきっかけで発生したもの、ある何らかの目的で作られたもの、したがって批判可能なもの、であるということを自他に示すことが課題だった。この問題は、『背徳者』からさかのぼること三年前の『鎖を離れたプロメテウス』においてすでに課されていたものである<sup>9)</sup>。

ジイドとダーウィンの関係の詳細についてはまた後で述べるとして、まず、両者の比較において、以上のジイドの関心事である、人類にとってのモラルの発生ということについて検討したい。

さて、ダーウィニズムは、人類の起源は動物であることを含意するものであるが、『種の起源』の段階では、ダーウィンは、とまどいから、そのことを明記するにはいたらなかった。人類の祖先が、はっきりと下等動物であるとされるのは、十二年後の『人間の進化と性淘汰』<sup>10)</sup>においてである。ここで、ダーウィンは、善と悪の観念、そして良心という感覚がどのようにして人間に生じたかを、動物を例にとって説明している。

いろいろな動物のどれもある種の美的感覚を備えていながら、それぞれ非常に異なる物体を称賛の対象としているのと同様、動物たちはよいことと悪いことの感覚をそれぞれ備えていながら、種によって大きく異なった行動をとるかもしれない。非常に極端な例をあげるならば、たとえばもしも人間がミツバチとまったく同じような状況で育てられたならば、結婚していない女性は、働きバチがそうであるように自分の兄弟を殺すのが聖なる務めであると信じ、母親は自ら繁殖可能な娘を何とかして殺そうとし、誰もそれを止めようとは思わないに違いない。それはともかく、ミツバチであれであれ他のどんな社会的

動物であれ、今問題にしている状況では、正しいことと悪いことの間、または良心というような感覚を獲得するものと私には思われる<sup>11)</sup>。

また、「道徳的」と呼べるような観念については、次のように述べている。

愛情と共感のほかにも、動物は私たちにとって道徳的と呼べるような性質を示すことがある。そして私は、イヌは良心に非常に近いものを持っているという、アガシーの意見にはまったく賛成である。彼らは確かに克己心に似たものを持っており、それはあながち恐怖に根差しているばかりではない。ブラウバッハが指摘しているように、イヌは主人のいない間に食物を盗むことはしない。イヌは、長い間忠実と従順そのものの代表とされてきた<sup>12)</sup>。

人間にとっての倫理の根源をダーウィンに倣って動物のレベルにまで遡って考察すれば、その相対性ということに行き着く。というのも、「動物たちはよいことと悪いことの間をそれぞれ備えていながら、種によって大きく異なった行動をとるかもしれない」からである。とすれば、倫理のこの発生地点において、善悪の観念は、その絶対的な根拠を失ってしまう。モラルの相対性ということが、かつて絶対的とおもわれたモラルの力を突き崩すその武器となっていることを思えば、ジイドもまた、意識の発生についての関心をもつとき、動物における倫理感や美的感覚の発生状況に興味を示すダーウィンと同じ地点に立っていたということがいえるだろう。

ただし、私家版『コリドン』（一九一一年）の時点でジイドが『人間の進化と性淘汰』を読んでいたことは明白であるとしても——彼は『コリドン』のなかでこれを引用している<sup>13)</sup>——、遡って、一九〇二年の『背徳者』の時点で、ジイドが『性淘汰』のこのミツパチやイヌの部分を読んでいたことの直接的証拠はない。とはいえ、さらに遡ること三年、『鎖

を離れたプロメテウス』の時点で、ジイドがすでに、おそらくダーウィンの影響を受けて、「美の意識」の発生にこだわっていた、ということは注目にあたいます。『プロメテウス』のジイドは次のように書く。

彼ら [= les hommes] は存在してはいましたが、存在しているという意識をもっていませんでした。照らすのに火をあたえたように、皆さん、この意識というものを、ありったけの愛を注いで、私は彼らのために作ってやったのです。彼らが抱いた最初の意識、それは自分達の美しさという意識でした<sup>14)</sup>。

他方、ダーウィンはすでに、『性淘汰』において、動物における美の意識の発生について論じており、その論のために、「Sense of beauty」の小見出しをつけた節を設けている。

この意識 [= 美の意識] は、人間に固有であると主張されてきた。しかし、雄の鳥が雌の前で、その羽や素晴らしい色を洗練されたやり方で見せびらかすのを目の当たりにし、一方で、そのような飾りを持たず、そのような求愛ディスプレイもしない鳥もいることを知ると、雌がパートナーの雄の美しさに見とれることがないと考えるのは不可能である。(…) 想像力、驚異、好奇心、何に対してとは限らない美意識、模倣の傾向、興奮や新奇さに対する好みといった数々の性質は、人間が進歩していくにあたってはかりしれない助けとなったものであるが、習慣や流行をきわめて気まぐれに変化させることにもなった<sup>15)</sup>。

とはいえ、「美意識」をめぐる両者の考えの類似も、ジイドがダーウィンから何らかの影響を受けたことを推測させるものではあっても、これを保証するものではない。で、これを補強するため、両者に共通するプリミティヴなものへの関心をあげておく。『背徳者』のミシェル＝ジイドは、ノルマンディーやアルジェリアの少年達を通じて、プリミティヴな

ものへの関心を示している。意識の発生への関心と同様、このプリミティブなものへの関心は、数年後にはジイドが確かに読んだことがわかっている、『性淘汰』や『ビーグル号航海記』のダーウィンの領域へと通じている。

以下は、一九一一年に印刷された『コリドン』の一節である。

結局のところ、たとえば、ダーウィンが一八三五年に上陸したときのタヒチのような、『トリフェーム』<sup>16)</sup> が実現されている未開原住民が、しかも極めて美しい原住民がある（少なくともおよそ五十年前、宣教師達の仕事がなされる前にはそうだった）。彼は、原住民の素晴らしさについての記述を、感動に満ちた数頁にわたって行っている。次に、『正直なところ、女達にはいささか失望した』と、彼は付け加えている。『彼女達の美しさは、男達の美しさにまったく及ばない』と<sup>17)</sup>。

続けてダーウィンは、美における劣勢を、女性達は衣服や装身具によって補っているとしている。未開原住民における、慣習や意識やモラルの発生の問題に興味をしめすダーウィンに、ジイドもまた、ウラニストとして、多大な関心をよせていたことがわかる<sup>18)</sup>。

ジイドが注目するこの意識の発生地点は、逆説的表現によってしか語れないような尋常でない地点、いわば特異点を形成しているといえるだろう。たとえば、ダーウィンが指摘した動物達の美の意識と同様、ジイドのプロメテウスが語る美の意識は、繁殖のための性本能とほとんど区別がつかない段階にあるようにみえる。このために、次のように演説するプロメテウスは、いわば卵が先か鶏がさきかの類の循環論法におちいってしまう。一行だけ重ねて引用するが、以下は注14) に続く部分である。

彼らが抱いた最初の意識、それは自分達の美しさという意識でした。このことこそは、人類という種の繁殖を可能にしたのです。人は代々、

引き継がれていきました。最初の人達の美しさは、どうでもよい、どうでもかまわない、どうということもないものとなって、語り継がれました。こういったことは、そのままずっと長く続きえたのかもしれませんが。それで、心配になって、というのも、知らず知らずのうちに、自分のなかにもうすでに私の鷺の卵を抱いていたのですが、私は、それ以上のもの、よりよいものを望んだのです。この繁殖、この千切れ千切れの延長は、私には彼等のうちに期待があることを指し示すものと思われました。ところが、実際には、私の鷺だけが期待を抱いていたのです。私は、よく知らなかったのです。この期待、私はそれが人間のうちにあると思っていました。その期待、それを私は人間のうちに置いたのです。それに、人間を私の姿にかたどって作ったものだから、今や私には、各々の人間の中に何か孵化していないものが期待を抱いていたことがわかるのです。彼等のおのおののうちに鷺の卵があったのです。それからのことは、私にはわかりません。私はそれを説明することができません<sup>19)</sup>。

他方、『背徳者』のミシェルもまた、自分の領地の獲物を自分で密猟するという、いわば「逆説的」な振る舞いをするにいたる。密猟がなされていることを知ったミシェルは、取り締まるどころか、猟をすることの楽しさから密猟者と共謀して、自分の森で密猟を行い、収獲の方は、彼にその手ほどきをしてくれた共謀者アルシッドにあげてしまう（668）。とすれば、捕獲されたウサギは結局、誰のものだったのであろうか。こうして、読者は「所有」という権利の問題の始原へと導かれていく。

鋏をめぐるエピソードでも、ミシェルは、自分の所有物（正確には彼の妻マルスリーヌの持ち物である鋏）が盗まれるのを是認したといえる。鏡をとおしてではあるが、アルジェリアの少年モクティルが鋏を盗むのを現に目にしていたにもかかわらず、ミシェルはこれを黙認してしまう（618）。モクティルのほうでも、自分が盗み見られていたのを盗み見っていたことが後になってわかる（649）。モクティルを咎めなかったミシェル

を、モクティルもまた咎めなかった。共犯者としてミシェルがモクティルといっそう親しくなるのは、この相互の黙認によってである。以上のような奇妙な振る舞いによって、ミシェルは、所有という権利を無化するにいたる。

ミシェルはまた、鋏がなくなったことを妻が不審に思わないような口実をもうけることで (618)、妻がその所有権の行使をする道をも封じてしまう。後になって、メナルクの指摘により、人は、所有しているものによって所有されていることにミシェルは気づかされる (656)。ミシェルにとって、鋏の所有を正当なこととして主張するであろう妻マルスリーヌの存在は、物の所有ということが意味する足かせそのもの、とどのつまり、財産の所有と管理ということのうえになりたつ結婚という制度のうっとうしさそのものであり、少年達の傍らにいるときの喜びは、いまや重荷になったマルスリーヌの存在からの解放感でもあったといえる。

ところで、『人間の進化と性淘汰』のダーウィンと『背徳者』のジイドとのあいだには、意識の発生ということに関して、興味の持ち方にずれがある。ジイドの関心が、発生現場にたつことによってモラルの根拠を無化することにあつたのにたいして、ダーウィンの場合、道徳観念や良心に相当する意識の、動物における獲得過程が研究対象であるのは、生物学的関心からである。たとえば、同胞殺しをするミツバチの「モラル」と、忠実な犬の「モラル」は違うとしても、ダーウィンの関心が向かうのはモラルというものの相対性というより、各々の生態とその意識との関係にである。たとえば、イヌについては、こう述べられている。「イヌは、長い間忠実と従順そのものの代表とわれてきた。たがいに助け合ったり、ともに敵を攻撃し合ったりするような、群れで生活している動物ならばすべて、たがいに対して何らかの忠実さを持っているに違いないし、リーダーに従う種類のもは、ある程度の従順さを持っているだろう」<sup>20)</sup>。彼は、ミツバチが同胞殺しをすることをもって、人類の殺人を正当化することも、反対に、ミツバチを非難することもしない。ダーウィンは、動物にとっての「モラル」の価値について云々することにつ

いては、人間の道徳性についてと同様に、慎重な態度をとっている。両者の違いは、一言でいえば、ダーウィンは、モラリストであるまえに生物学者であり、アマチュアのナチュラリストでもあったジイドは、それ以上にまずモラリストであったところからくるといえるだろう。

生物学者ダーウィンは、「起源」ということについての考え方に慎重であり、モラリスト・ジイドの場合は大胆である。ここに、両者の大きな違いがある。逆説的な言い方をすれば、『種の起源』で唯一語られていないものがあるとすれば、それは、「種の起源」であるといえる<sup>21)</sup>。自らの著書に『種の起源』という表題をつけたとはいえ、彼は、最初の最初という意味での「種の起源」を示すことはしなかった。デネットの指摘によれば、ダーウィンは「中間からスタート」している<sup>22)</sup>。ダーウィンは、すでに地球上に現れている生物システムが、時間とともにどのように進展していくかのモデルを示すことはしたが、そしてこれは現在の生物学でもできないことであるが、その生物システムが、ひいては最初の一個の生物が、どのようにして地上にあらわれたについては語らなかった。ジイドには、おそらくこれが物足りなかったのである。

ダーウィンは、科学的には、進化論は、中間段階からしかスタートできないことを知っていた。ところが、モラリストであるジイドの方は、性急に、『創世記』の段階にまで遡る。人間が作り出した、制度や文化や慣習の基礎を問うだけではなく、ジイドは、世界と人間が作り出されたときの状態、あるいは旧約聖書冒頭においては神の働きとされてきた創世の作用について知りたいと思っている<sup>23)</sup>。ピューリタニズムへの恨みの書『背徳者』で、ジイドは、『鎖を離れたプロメテウス』におけるのと同様、最初の最初へと遡ることによって神の真価を問うことができる立場に身を置く。

ダーウィンの中間段階をさらに遡って、一足飛びに起源に立ちたいというジイドの強い思いは、「文化とは命から生れて、命を殺すものである」というときの「命」(vie)が、必ずしも生物学的な意味での「生命」に局限されるものではなく、情熱として燃え立つ「命」でもありうると

いう、この語の多義性からもいえるであろう。情熱によって誕生した瞬間における一つの「命」と、その後、その情熱を連綿として受け継いで文化を作り出していく諸々の「生命」とが、ここでは同一視されている。ミシェルが、自分のうちに新たな「命」が生れたように感じたのも、起源としての「命=生命」の誕生の疑似体験としてである。

ところで、ダーウィンの『種の起源』によれば、ある与えられた原種は、その後、枝分かれしていくのだが、こうして出来た新しい種のごく僅かだけが生き残って、それがさらにまた枝分かれをしていく。このダーウィンの理論が目的論と相容れないものであることは、この分岐のパターンを示した有名なあの「枝分かれ図」<sup>24)</sup>が雄弁に語っているといえる。進化の道筋は、環境に最も適したものだけが生き残るという原理によってのみ決定されるのであって、未来のことは誰にもわからないという点において、その進化論は、時間軸を、過去から未来へとプラスの方向へと追いかけていくものである。

これにたいして、『背徳者』の進化論的発想の場合は、意識や制度や慣習を、その起源へとさかのぼる。なるほどミシェルは過去を嫌うのだが、過去と起源とを同一視してはならないだろう。『背徳者』の進化論的発想とは、過去の痕跡を宿すものとしての現在、いや宿しているからこそ硬化している現在、その現在の制度や慣習にも生き生きとした起源があったはずだとし、現在から起源へと遡ろうとするものである。このように、同じあの「枝分かれ図」でも、これをマイナスの方向にたどるとき、ダーウィンの進化論が含意するところのあの非目的論的性格は、幾分、蔑ろにされることになる。ダーウィンの種は、くねくね曲がりながら行く末を探し求めていくのだが、ミシェルの方は、すでに辿られてきた道を今度は逆向きにはあるが一直線に起源へとさかのぼる。原種から出発して考えるダーウィンの「枝分かれ図」の場合、そこから出て来た数多くの種は、箒の先のように未来を広げながらも、多くはその穂先を枯らしてしまっている。この場合、現在生きている種（現生種）は、存続しえたかもしれない種（絶滅種）のごく一部にすぎない。これに対して、



ミシエルのように、現行の制度や慣習から過去へさかのぼる場合、——「枝分かれ図」でいえば、現在生きている種（現生種）から時間軸をさかのぼる場合——、そこには、百パーセントの確率で起源がある。起源へ向かう逆向きの運動によって、ダーウィンの「枝分かれ図」の非目的論的性格は、否定されはしないにしても、見えにくくなってしまう。以上のようなニュアンスの違いを認めたいうえであるが、『背徳者』の進化論的発想は、いわば裏返された進化論であったといえるだろう。進化するものについて語るというよりも、進化をやめた文化や制度への警告として語られるという点からいっても、これは、裏返された進化論であるといえる。

しかしまた、両者の関心には相違もみられる。そこで、『背徳者』にみられる進化論的発想が、生物学上のいわゆる進化論の影響を直接に受けたものなのかどうかを、以下で、検証してみよう。

さて、『背徳者』執筆の七、八年前に、ジイドが『種の起源』の読書に熱中したことは容易に確認することができる<sup>25)</sup>。また、『背徳者』の数年後には、『ビーグル号航海記』をジイドが再読したことが分っている。また、一九一一年に印刷された私家版『コリドン』においては、ダーウィンの『性淘汰』や『ビーグル号航海記』や『蔓脚亜綱論』のほか、ラマルクやド・フリースのような進化論者、スペンサーやベルクソンのような進化論的思想家への言及もみられる。

ところが、その中間に位置する『背徳者』は、いわばミッシング・リンクを探さなければならない空白段階にあるといえる。というのも、日記、書簡、批評文、ジイド自身あるいは第三者による証言のレベルにおいて、『背徳者』とダーウィンを直接的に結ぶ資料はほとんど何も見つからないからである。

ただ一つだけ、注目すべきことがある。ジイドは、一九〇〇年十月二十四日のマルセル・ドルーアン宛ての未刊の手紙に、「笑ってくれるな」としながら、「頭が明晰なときなど」に、「ダーウィニズムと創造説を両立させる」ように努めている、と書く<sup>26)</sup>。こう書き送った一九〇〇年十

月二十四日は、『背徳者』の執筆期間にあたる。いや、もっと正確にいうならば執筆期間における中だるみの段階に相当する。ちなみに、Pierre Masson の推定によれば、ジイドがいよいよ『背徳者』に着手したのは一九〇〇年八月十日である。そして、八月十三日には、ミシェルが血を吐く場面を書く（十四日の手紙）。九月四日には、モクティルが鋏を盗む場面で、筆がとまってしまう。そして、マルセル・ドルーアンにダーウィニズムと「創造説」とのドッキングの計画について書くのが十月二十四日である。ジイドは、十一月、筆がすすまないままに、アルジェリアへとまた旅立っていく<sup>27)</sup>。

この「創造説」(créationnisme) とは、『創世記』にあるように、生物は天地創造の際に一挙に作られてその後は変わらないとする、当時の生物学上の一学説のことである。この創造説という極め付きの「非進化論」と、ダーウィニズムという先鋭な「進化論」とを組み合わせ、これを両立させようというジイドの破天荒な試みのうちには、一方では、進化を否定してしまう創造説というものの欠点をダーウィニズムによって埋め合わせようという思わくを、他方では逆にまた、起源というものに言及しないダーウィニズムへの不満を創造説によって補完できるのではないかという期待をみることができるかもしれない。いずれにしても、依然としてジイドが創造説にもこだわっていた背景には、ダーウィニズムが中間からしかスタートしていないことへの不満、最初の最初を示していないというもの足りなさへの不満がこめられているといえる。

両者をドッキングさせるというこの無謀な計画は、ある意味では『背徳者』で実現されたと言える。というのも、『背徳者』にみられる、始原についてのミシェルの発想は、裏返された進化論であり、すなわち、この意味で半ばのダーウィニズムであると同時に、また、起源へとさかのぼる進化論、すなわち創造説の性格を帯びた進化論でもあるからである。両者から、ジイドにとって都合のよいところだけを引き出してみると次のようになる。つまり、ジイドは、ダーウィンの進化論からは、生物も、人類の意識も、人間の制度も、すべては進化するものであることを持つ

てくることができる。他方、創造説には、ダーウィンの進化論にはないところの、『創世記』に対応する「起源」がある。ただし、その始まりの状態は、神によって敷かれたあの純然たる天地創造の場合とは違って、進化論によって修正がほどこされている。つまり、そこでは、決定されているもの、規定されているものは何もなく、非目的論的に、すべてがこれから生れようとしている。そういう意味では、この起源は、白紙であるともいえるし、またカオスと背中合わせになっているということもできる。水と油のような両者がドッキングされたこの考え方は、「神は、全創造の到達点であって、出発点ではない」という、論者が《来るべき神》<sup>28)</sup>の思想と呼んでいるところの、以後のジイドの、一見したところ逆説的な考え方も一致するものである。

これまでの『背徳者』についての先行研究を点検してみると、ミシエルの個人的モラルの有りようについては十分すぎるほどに論じられてきたといえる。しかし、このとき、ミシエルの体験とはその個人的体験にすぎないものであった。たとえば、ミシエルの「病気」と「血」をテーマとしたSidonie Rivalin-Padiouの論文《Le motif du sang dans *L'Immoraliste*》は、肉体にかかわるそのテーマの性格により、ミシエル個人の問題から離れるには至らなかった<sup>29)</sup>。また、ミシエルにおける善と悪の観念を、彼が身につけたショールの役割の二面性、すなわち体の保温と隠蔽というその二重の役割に帰してしまったNorma Halévyの場合も同様である<sup>30)</sup>。しかし、ミシエルを気詰まりにする制度や慣習や既成宗教への批判の基礎となっているのが、進化論的発想であることを忘れてはならない。制度や文化も進化するものであり、進化しなければならないものであるが、ときとして進化することをやめてしまうものでもある。起源に関心をもつミシエルの背徳性は、その個人体験のスパンが、制度や文化の歴史的・進化論的展開のスパンと重ね合わせられ、同期させられ、共振することによってはじめて正当化されるものである。こう考えれば、パリ、ノルマンディー、北アフリカをめぐる彼の旅程は、三年間の個人的体験であったばかりでなく、「プリミティヴ」なものへと向かう歴史的なスパンの

体験でもあったということができる。

冒頭で述べたように、『背徳者』をふくむジイドの「レシ」というジャンルは、基本的には、進化論的・複雑系的発想とは相容れない形式である。出来事が自らの進行を選び取っていくような「ソチ」や「ロマン」の形式とは違って、「レシ」では、出来事の選別をするのは、語り手でもある主人公であるからである。「レシ」である『背徳者』がそれでも進化論的であるのは、新しい命、蘇生というそのテーマによってにはかならなかった。

とすれば、ミシェルが、考古学者として設定されていたことも、決して偶然ではないであろう。考古学者は、生物学でいえば、各年代の地層の化石を調べる古生物学者に相当する。古い地層にはない化石が、新しい地層に見つかることの、古生物学者達による発見、この衝撃的な事実のうえに、それを説明すべく、進化論が成立したということをおぼえ、考古学の基礎を修めたこの新進気鋭の学者から進化論的発想が生じたということは偶然ではないであろう。その進化論から生じた新しい奇妙な生物、それがミシェルという種であったことは言うまでもない。

(大阪市立大学教授)

#### 注

- 1) ジイドにおける「自由」と「拘束」のテーマについては、たとえば、René-Marill Albérés, *L'Odyssee d'André Gide*, La Nouvelle Edition, 1951を参照のこと。
- 2) David H. Walker, «Gide, Darwin et les théories évolutionnistes», *Bulletin des Amis d'André Gide*, n° 89, janvier 1991, pp. 63-75.
- 3) André Gide, *L'Immoraliste, Romans et récits* — *Œuvres lyriques et dramatiques I*, Bibl. de la Pléiade, Gallimard, 2009, p. 646. なお、*L'Immoraliste* からの引用についてはこの版から行い、以下、頁を示す数字のみを記す。
- 4) Archéologue, Michel pouvait se sentir réconforté par l'immobilité ; malade, il a craint: L'histoire du passé prenait maintenant à mes yeux cette immobilité, cette fixité terrifiante des ombres nocturnes dans la petite cour de Biskra, l'immobilité de la mort. (Michael Johnson, «Écrire la maladie : une lecture de *L'Immoraliste*», *Bulletin des*

*Amis d'André Gide*, n°131-132, Juillet-October 2001, p. 388.)

- 5) ローマ帝国における三つの衰退期については、エドワード・ギボン『ローマ帝国衰亡史 I』中野好夫訳、ちくま学芸文庫、一九九五年、pp.9-10.  
GideはEdward Gibbonの*History of the Decline and Fall of the Roman Empire*を晩年には読んでいる。また、Montesquieuの*Considérations sur les causes de la grandeur des Romains et de leur décadence*についても、晩年には読んだことが分っている。『背徳者』の時点で、Gideがローマ帝国衰退についての知識をどこからどの程度えていたのかは不明であるが、父Paul Gideが、ローマ法の教授であったことの直接的・間接的な影響はあるだろう。ミシェルが考古学者になったのも、父の影響からという設定になっている。
- 6) André Gide, *Journal — 1887-1925*, Bibl. de la Pléiade, Gallimard, 1996, p. 1165.
- 7) 津川廣行「『来るべき神』の思想 — ジイドへの進化論の影響について —」、『仏語仏文学』38、関西大学フランス語フランス文学会、2012年3月。
- 8) 西村和雄は「複雑適応系」を、次のように定義している。「そして、ネットワークによる個の関連を、複雑適応系と呼びます。その特徴は、第一に、個を結ぶネットワークが存在すること、第二に、個を規定する単位とネットワークが例えば細胞、組織、期間、個体、集団と複数の層に分けられること、第三に、システムが変化をもたらし、その変化が、個の分析（すなわち還元的手法）では説明できないことなどです」。上田皖亮・西村和雄・稲垣耕作『複雑系を超えて — カオス発見』、筑摩書房、一九九九年、pp. 106-107.
- 9) 「発生」の問題については、大阪市立大学における「リュテス」での2011年9月10日の発表「フランクリンの「諺」からみた『鎖を離れたプロメテウス』 — 複雑系的ジイド論の一環として —」で言及した。この発表では、『鎖を離れたプロメテウス』においては、いわばモラル内在説とでもいうものと、他方、モラル外来説とでもいうものが、モラルの「発生」時においては、トートロジックな循環によって同じ一つのものになってしまう、とした。本論文の注19)の文を参照のこと。
- 10) チャールズ・ダーウィン『人間の進化と性淘汰』、すなわち、*The Descent of Man and Selection in Relation to Sex*の表題は、『人間の由来』と訳されることもある。
- 11) チャールズ・ダーウィン『人間の進化と性淘汰 I』長谷川真理子訳、文一総合出版、一九九九年、pp. 71-72.
- 12) *Ibid.*, p. 76.
- 13) André Gide, *Corydon, Romans et récits — Œuvres lyriques et dramatiques II*, Bibl. de la Pléiade, Gallimard, 2009, p. 93の脚注で、ダーウィンのこの著書が、*Descendance*

*de l'homme* の書名で引用されているところから、ジイドはこれを、仏訳で読んだものと推測される。少なくとも、ジイドは、この時点で、Charles Darwin, *La Descendance de l'homme et la sélection sexuelle*, trad. par Edmond Barbier, Reinwald, 1891を入手できたはずである。

- 14) André Gide, *Le Prométhée mal enchaîné, Romans et récits* — *Œuvres lyriques et dramatiques I*, Bibl. de la Pléiade, Gallimard, 2009, p. 490.
- 15) チャールズ・ダーウィン『人間の進化と性淘汰 I』長谷川真理子訳、文一総合出版、一九九九年、pp. 63-64. なお、注13)で挙げたEdmond Barbierの版では、「sense of beauty」は、「sentiment du beau」と訳されている (*La Descendance de l'homme et la sélection sexuelle*, éd., citée, p. 97)。
- 16) Tryphème とは、注17)の引用文に施されたプレイヤード版の注によれば、ピエール・ルイスが夢見たユートピア。
- 17) André Gide, *Corydon*, éd., citée, p. 115.
- 18) この箇所は、ウラニスムというコンテキストからの、コリドンとその対話者である「私」のダーウィン理解において重要であるので、いわゆる『ビーグル号航海記』からその全文を引用しておく。

J'avoue que les femmes m'ont quelque peu désappointé ; elles sont loin d'être aussi belles que les hommes. Cependant elles ont quelques costumes fort jolies, celle, par exemple, de porter une fleur blanche ou écarlate sur le derrière de la tête ou dans un petit trou percé dans chaque oreille ; elles portent souvent aussi une couronne de feuilles de cocotier, mais ce n'est plus un ornement, c'est une simple protection pour les yeux. Au résumé, il m'a semblé que les femmes, bien plus encore que les hommes, gagneraient beaucoup à porter un costume quelconque. (Charles Darwin, *Voyage d'un naturaliste autour du monde fait à bord du navire le Beagle de 1831 à 1836*, traduit de l'anglais par Edmond Barbier, La Découverte / Poche, 2003, p. 434.

- 19) André Gide, *Le Prométhée mal enchaîné*, éd., citée, p. 490-491.
- 20) チャールズ・ダーウィン『人間の進化と性淘汰 I』、前掲書、p. 76.
- 21) ダニエル・C・デネットは、その『ダーウィンの危険な思想——生命の意味と進化』山口泰司監訳、二〇〇一年、青土社、p. 60で、次のように書いている。

種分化のメカニズムについての輝かしくはあっても要領をえないダーウィンの熟考を、ある程度までは証明可能な説明で置き換えるのには、その後の百年にわたる更なる研究を必要とした。種分化のメカニズムと原理についての論争はまだ続いているのだから、ダーウィンも後に続くどんなダーウィン主義者も、ある意味では種の起源の説明をまだしていないことになる。遺伝学者のスティーブ・

ジョーンズが指摘したように、「ダーウィンが自分の傑作を今日そのままのタイトルで出版したら、『誇大標示禁止法に抵触しただろう。なぜなら『種の起源』が扱っていないものが一つあるとすれば、それは種の起源だからだ」

- 22) ダーウィンは自分が〈最初の〉種の起源や生命そのものの起源の説明をしているのだなどとは思ってもいない。かれは、多くの異なる種が多くの異なる能力をもってすでに存在していることを前提に、中間からスタートしているのであって、そうした中間地点から出発すれば、かれの記述したプロセスが、必然的に、すでに存在している種の能力を磨き上げ、多様化することになるのだと言っているのである。(ダニエル・C・デネット、前掲書、pp. 58-59)
- 23) André Gide, *Les Nourritures terrestres, Romans et récits — Œuvres lyriques et dramatiques I*, Bibl. de la Pléiade, Gallimard, 2009, pp. 366-367における「Ronde des belles preuves l'existence de Dieu」は、すでに、進化論の立場からの『創世記』のパロディーとなっている。
- 24) チャールズ・ダーウィン『種の起源』(上) 渡辺政隆訳、光文社文庫、二〇〇九年、pp. 210-211 の「枝分かれ図」を参照のこと。
- 25) ジイドとダーウィンの著書との出会いについては、津川廣行「《来るべき神》の思想 — ジイドへの進化論の影響について —」、『仏語仏文学』38、関西大学フランス語フランス文学会、2012年、p. 94-100を参照のこと。
- 26) Enfin, dans ses « moments de lucidité », il s'essaye à « réconcilier Darwinisme et créationnisme » : « Ne ris pas », demande-t-il à Marcel Drouin, « voilà déjà quelque temps qu'une lueur de cela... mais cela se précise et me satisfait;[...] ». (Claude Martin, *La Maturité d'André Gide — De Paludes à L'Immoraliste (1895-1902)*, Klincksieck, 1972, p. 479.)
- 27) *L'Immoraliste* の構想過程については、Henri Mailet, *L'Immoraliste d'André Gide*, coll. « Lire aujourd'hui », Hachette, 1972, p. 16を参照のこと。ただし、Gideが『背徳者』を実際に書き始めた日の推定についてはPierre Masson, « Notes », *Romans et récits — Œuvres lyriques et dramatiques I*, éd., citée, p. 1376. 書き始めた日、ミシェルが血を吐いた場面を書いた日の根拠は、Henri Ghéon et André Gide, *Correspondance*, t.1, Gallimard, 1976, p. 279 ; p. 283.
- 28) 注6) を参照のこと。
- 29) Sidonie Rivalin-Padiou, « Le motif du sang dans *L'Immoraliste* », *Bulletin des Amis d'André Gide*, n°113, Janvier 1997, pp. 7-16.
- 30) Norma Halévy, « Du châte et des ciseaux à la découverte du « MOI » dans *L'Immoraliste* », *André Gide 7, Lettres Modernes Minard*, 1984, p. 71.